

しが国際協力親善大使レポート

たはら はなえ
田原 英恵さん

隊次：2015年度3次隊

職種：看護師

派遣国：ラオス

自己紹介

滋賀県近江八幡市出身。看護学生の頃から国際協力に興味を持っていました。就職後、休暇を使いカンボジアへ一人旅をしたときにアンコール小児病院を訪れ、途上国の医療の現状を知りました。下痢や脱水、栄養失調など日本でなら助かるはずの子供たちが生きられないという現状を知り、看護師として何かしたいと強く思い協力隊に応募し 2016 年 1 月にラオスへ赴任しました。

ラオスについて

みなさん、ラオスという国を知っていますか？私は協力隊の派遣先がラオスと書いてあるのを見て、初めてラオスという国を知りました。ラオスは東南アジアのインドシナ半島に位置し、日本の本州とほぼ同じ大きさで中国、ベトナム、カンボジア、タイ、ミャンマーと国境を接している内陸国です。滋賀県と同じく海に面していないことに親近感を感じています。暑季（3～5月）、雨季（6～10月）、乾季（11～2月）の3つがあり、1年を通じて熱帯モンスーン気候ですが北部の山岳地帯は乾季にはかなり気温が下がります。

ラオスの主食のカオニャオというもち米がとても美味しく、手で小さく握ったカオニャオを野菜やお肉、魚と一緒に食べます。ラオス料理は日本人の口にとても合うと思います。

ラオスの人は温厚でのんびりしていて、初対面はシャイでも一度話すととてもフレンドリー。道を歩いていると「どこいくの？」「ご飯は食べた？」と気さくに声をかけてくれたり「一緒にご飯食べよう！」と誘ってくれ、海外での生活が寂しくなったときもラオスの人の温かさに救われています。

活動について

私はラオス中南部に位置するサワンナケート県にある県病院の小児科新生児室で活動しています。当院で産まれる赤ちゃんは1か月に約150人、そのうち異常があり新生児室に入院する赤ちゃんは約30人、その中で助からなかった赤ちゃんは約1人。ラオスの病院は日本と違い、入院患者さんのご飯や着替えなどの身の周りの世話はすべて家族がします。新生児室も同じで、産まれたての赤ちゃんのミルクやオムツ交換も家族が付き添い行きます。日本の新生児室は看護師が24時間すべて管理をしていて、このような日本と違

う文化、病院のシステムに最初は戸惑い不安を感じていました。また赴任直後は、看護技術の指導をするには現地語の語学力が十分でなく、また同僚よりも若い日本から来た看護師に口を出されても聞いてもらえないのではないかと感じ、まずは同僚と一緒に仕事をすることになりました。自分の身を守るために侵襲的な医療行為（採血、点滴など針刺し事故の危険性があるもの）はしない方が良いのかもしれませんが、言葉で説明することが難しいのであれば実際にやって見せることが、今自分にできることだと思いました。同僚と一緒に採血や点滴、沐浴などをしていくうちに「日本のやり方は一緒？」「日本ではどうしてるの？」と聞いてきてくれるようになりました。外から来た片言の日本人に「こうしたほうがいい」「これはすべきではない」と考えを押し付けられても、受け入れてはもらえないということ、ラオス人が必要性を感じて自ら改善しようとしなければ、医療は変わっていかないということを感じています。

ラオスに来て、日本で看護師をしていたときよりも生と死をより身近に感じています。ラオスの新生児死亡率は10年前と比較すると明らかに改善していますが、日本と比べると医療の限界を感じずにはられません。赴任して1年になりますが、助けることができなかった赤ちゃんの身体を拭いて服を着せてあげて家族が連れて帰る瞬間は、何度あっても悔しく、悲しくてなりません。そのたびに無力感を感じ、自分がここにいる意味と何ができるのかを考えています。

今後5年後、10年後のラオスの医療が発展しひとりでも多くの命が助かるように、目の前にいる患者さんと向き合い、自分とも向き合い残りの任期を頑張りたいと思います。



職場でみんなで食べるお昼ご飯。スパイシーで美味しい！



活動風景。同僚と一緒に。



活動しているサワンナケートのメコン川で見れる夕日。



赤ちゃんの可愛さは万国共通！